

## おばけの季節【自棄糞篇】

陽羅 義光

この歳になってようやく、自棄糞（やけくそ）になる気分というものが解ってきました。

大相撲の先代若乃花が、  
「人間辛抱だ」

といったけれども、それはわれわれの世代にとっては、最も身に沁みる人生訓であったとおもわれます。

辛抱辛抱でどうにかなった時代であったからで、現代の若者にはよく理解できないかもしれません。

とにかく辛抱するのが厭で苦手、それゆえに辛抱を強要されると、爆発するか自殺するか。

だれに強要されるかという、社会や学校や会社や家族や友達や、あれやこれや。もしかすると、自分の中の自分に強要されているのかもしれない。

これを単純に被害妄想とばかりもいえないのは、いまは辛抱辛抱でどうにかなる時代ではないからです。

自殺者の多さ、殺人者の多さは、ここ百年でも一番ではないかとおもわれるのは、ネットも含めたメディアが発達しているからかもしれませんが、自殺者と殺人者の大半はじつに莫迦莫迦しい状況下のものです。

ラインのトラブルで自殺、殺人なんてのも、軽薄で莫迦莫迦しいし、長い人生のなかでの、ほんの一ときの季節に、いじめにあい自殺するのも、哀れで莫迦莫迦しい。

ほんの数千円を盗むために殺人したりするのも、惨めで莫迦莫迦しいし、一億円保険金殺人でも、金の亡者で莫迦莫迦しい。

「どうしてあんなことをしたのか」

ときくと、

「いらついたから」とか、

「むかついたから」とか、

または、それに似た答えが返ってくる事件が頻発しています。

その極端な例は、莫迦莫迦しさの極北、無差別殺人でしょう。

それは、個人の世界が狭すぎるせいのものであります。

加えて、社会全体がひどく病んでいるせいです。

さらに、学校教育がなっていないせいもあります。

まったくいまの日本は、おばけ屋敷で、いやお莫迦屋敷で、おばけもびっくりでしょう。

しかしこうしたお莫迦屋敷状況は、いまにはじまったわけではなく、大昔からあ

ったのですが、いまほどひどくはないので目立たなかったのです。  
ということで、こんどは辛抱辛抱が辛抱できない自棄糞おぼけを紹介しましょう。

禿光山人 拝

\* \* \*

「かいじいやい、わしは、がまんならんぞい」  
ぼくは懐爺にぶつけました。  
「どうしたんですか金ちゃん、わたしの臭いに我慢ならないのですか」  
懐爺は心配そうにききました。  
「いんや、かいじいのにおいにゃ、なれとる」  
「それなら何に、憤慨（ふんがい）してるんですか」  
「がっこういくと、せんせいも、せいとも、みんな、わしのこと、おぼけをみるめで、みるんじゃ」  
「それは自慢していいことで、我慢ならないことでは」  
「わしは、きが、みじかいんじゃ。しんぼう、ならんのじゃ」  
「そのくらいのこと、辛抱しないと、生きてはいけませんよ」  
「だども、おぼけじゃぞい」  
「わたしなら、優越感（ゆうえつかん）というもので、いっぱいになりますかね」  
「そらあ、かいじいは、かいじいじゃからのう」  
「金ちゃんだって、金ちゃんじゃからのう」  
懐爺はぼくの口調を真似ました。  
「ちゃかさんで、くれや」  
「つまり、発想とか視点をかえる、ということですよ。どうしてそんな目でみるのか、それを客観的にとらえればですね」  
そこで懐爺は唾を飲みました。  
「とらえれば、なんじゃい」  
「金ちゃんは畏敬されている、のかもしれない」  
「いけい、たあ、なんじゃ」  
「つまり、おそれいりました、おそろしいです、まいりました、ゆるしてください、うやまいます、という目かもしれない」  
「そうかなあ」  
「そうかなあ、ではなく、そうだと決めちゃうんです。そうすれば、むこうは、弱い人間、下の人間です。強い人間が、上の人間が、辛抱できないわけはありません」

「なるほどのう。もうちっとで、やけくそに、なるとこじゃった」  
「金ちゃんが自棄糞になったら、【やけくそおぼけ】よりもおそろしいですから、それだけはやめてください」  
　ぼくはききのがしません。  
「おっと、かいじい、いまなんというた。【やけくそおぼけ】たあ、なにかのう」  
　懐爺は頭をかきながら、  
「口がすべりました。金ちゃんが、自棄糞というもんだから、つい」  
「その【やけくそおぼけ】に、あわせろや」  
「わかりました。【やけくそおぼけ】もおそろしいですが、金ちゃんが自棄糞になったら、もっとおそろしそうですから」  
　懐爺はめずらしく素直です。  
　けれども、油断大敵。  
「それではしばし居眠りしてから」  
　懐爺は祠にもぐろうとします。  
「まてまて。わかりました、ということは、いまでしょ」  
「そういう発想とか視点は、わたしにはありませんでした。失礼しました」  
「ならば」  
「すぐに出かけましょう。【やけくそおぼけ】のいるところへ」  
　そうこなくっちゃ。  
「ぶきは、ひつようかのう」  
　ぼくは嬉々としてききました。  
「武器ですか。それなら一応これを」  
　といって、懐爺は背中から孫の手をひっぱりだしました。  
「てじなが、うまいのう」  
「手品ではないです。これでさっき背中搔いていて、入れ忘れたまんまになっていました」  
「なさけないのう」  
　ぼくが笑うと、懐爺も笑いました。  
　こういうのが、ぼくのいちばん好きな瞬間です。  
「では出かけましょう」  
　ふたりしてあるきはじめました。  
「とおいんか」  
「遠くはありませんが、近くもありません」  
「あいまい、じゃのう。ぐたいてきに、いえんのかのう」  
「たとえば、あと三十分とかですか」  
「そうじゃ」  
「あと三十分です」  
「いいかげんじゃのう」  
「まずは、中川のほとりに行きます」

「あいよ」

### 【がまんならん】

中川のほとりに着きました。

懐爺は孫の手をふりまわし、

「出てこいや、【やけくそおばけ】よ、出てこいや」

するとどうでしょう、水を豪快に押しつけて、川の中からもやら、莫迦でつかいものが。

「あったま、きたー。わしは、【やけくそおばけ】ちゅうんじゃねえ」

どうみても蝦蟇蛙（がまがえる）のおばけです。

絵本で見た、怪盗児雷也（かいとうじらいや）がまたがっている、巨大なやつ。

「知っていますよ。【がまんならん】でしょ」

懐爺は平然とこたえました。

「なんじゃー、わしのこと、知っているんかー」

「有名ですからね。でも、何に【がまんならん】のですか」

「みんな、わしのこと、醜い醜い、さわぐんじゃ。我慢ならん」

「みんなって、だれですか。金ちゃんもわたしも、醜いなんてかんじていませんよ」

懐爺は平然と諭しました。

「みんなとは、わしのおばけ仲間じゃ」

【がまんならん】は、口から煙をだしながら、我慢ならんという口調でこたえました。

「それなら、お互いさまじゃ、と怒鳴ってやればいいんですよ」

懐爺は、平然と提案しました。

「そうか、そうか、そうじゃ、そうじゃ」

ぶつぶついいながら、【がまんならん】は、川の中に沈んでいきました。

「金ちゃん、どうでしたか。【がまんならん】は、なかなかのおばけでしょう」

懐爺は、ぼくをふりかえっていいました。

ここで、そうじゃのう、というぼくではありません。

「かいじい、けしからんのう。わしも【がまんならん】と、はなしをしたかったがのう」

「それはすいませんでした。次はそうしましょう。中山に行きます」

### 【しんぼうならん】

中山のふもとに着きました。

懐爺は孫の手をふりまわし、

「出てこいや、【やけくそおぼけ】よ、出てこいや」  
すると、土の中から、ぶっとい心棒が突きでてきました。  
「だれや、おいらを呼ぶのは」  
「わたしだよ」  
懐爺は優しい声でいいました。  
「おう、ひさしぶりやんか。しかしおいらは【やけくそおぼけ】でねえよ。忘れたんか」  
「【しんぼうならん】でしょ。忘れるもんですか」  
懐爺は優しい声でこたえました。  
「それでええ。して、今日はなんの用で」  
懐爺に合わせて【しんぼうならん】も優しい声。  
「相変わらず、【しんぼうならん】ことばかりかね」  
「そうよ、おいらはしょっちゅう、辛抱ならん」  
とつぜん【しんぼうならん】は豹変し、心棒の頭から湯気をだしました。  
懐爺が合図をだしたので、ここでぼくの出番。  
「わしも、しょっちゅう、しんぼうならん」  
すると【しんぼうならん】の湯気は、火山の噴火とおなじ状態になって、  
「おまえはだれさ。おまえの辛抱なんか、おいら知るかい」  
「わしは、きんちゃんじゃ」  
「げっ、金ちゃんかい。ううむ、益々辛抱ならん」  
「わかったぞい。【しんぼうならん】のなかまが、みんな、かいじいとわしに、たいじされて、さびしゅうて、しんぼうならんのじゃな」  
「当たりじゃ。仲間が減るのは、辛抱ならん」  
「ならば、こうすっかのう。【しんぼうならん】のなかまは、みんな、ゆげ、だせや。ゆげだし、おぼけは、たいじせん」  
「ほんまかいな」  
「ほんまじゃ」  
「すまんのう、金ちゃん。それでよろしう頼んます」  
「やくそくじゃ。わすれるな、ゆげ、じゃぞい」  
「約束じゃ。忘れるもんかい」  
といつつ、【しんぼうならん】は土の中に戻っていきました。  
「金ちゃん、うまくいきましたね」  
懐爺は嬉しそうでした。  
ぼくも、やったあと手をあげました。  
こういうのも、ぼくのいちばん好きな瞬間です。

【やったるで一】

「次の【やけくそおぼけ】は、いささか厄介（やっかい）です」  
懐爺は釘をさしました。  
「やっかいでない、おぼけは、おぼけじゃねえ」  
ぼくは意気盛んでした。  
「とにかく、口よりも手が先にでるほうで、自棄糞になると、【やったるで一】と、すぐに行動にうつします」  
「それは、きけん、じゃのう。わしらもやられるかのう」  
「行ってみなければ何とも。とにかく身構えていてください」  
「りょうかい、じゃ」  
というわけで、ぼくたちは中の橋に行きました。  
橋の上に立った懐爺は、孫の手をふりまわし、  
「出てこいや、【やけくそおぼけ】よ、出てこいや」  
すると、橋の向うから、ひとつの大樽（おおだる）が転がってきました。  
「おれっちは、【やけくそおぼけ】じゃねえ。【やったるで一】だぜ、だぜえ」  
そして大樽は、いえ【やったるで一】は、ぼくたちを轢（ひ）き殺す勢いでやってきました。

橋の上に仁王立ちになった懐爺は、孫の手を突き出して、【やったるで一】の突進を止めてから、  
「そんなに自棄糞にならないでも、話せばわかります」  
「問答無用、言語道断」  
というと、【やったるで一】は烈しく爆発してしまいました。  
橋の上には大樽の残骸（ざんがい）が散らばっていました。  
「大丈夫ですか。怪我しませんでしたか」  
懐爺がきいてきたので、ぼくは、  
「みがまえて、おったからのう。かいじいのおかげで、いのちびろい、したぞい」  
「とにかく、話になりませんね」  
「わしも、きがみじかいが、あれには、かなわん」  
「結局、どうして自棄糞になっているのか、さっぱりわかりませんでしたね」  
「あのたるは、さかだる、かもしれんのが」  
「酒樽ですか」  
「そうじゃ。さけくさかったから、【やったるで一】は、よっばらっていたぞい」  
「それは気づきませんでしたね。さすがは金ちゃん」  
「よって、やけくそのりゆう、きいても、まともにや、こたえられんだろうがのう」  
「そうですか。だから、その答えられないという鬱憤（うっぷん）もあるんでしょかね」  
「とっしん、するやつあ、しゃべるのが、にがてなやつじゃ」  
「そういう意味では哀れですね」  
懐爺は大樽の残骸に掌を合わせました。

【かっどなる】

ぼくたちはそれから、中川の上流にすすんでいきました。

「こんどの【やけくそおばけ】は、なにがでるんじゃ」

ぼくがきくと、

「それは、出てからのお楽しみ、といたいところですが、出たときにぶったまげるといけないですから、これも事前に教えておきます。【かっどなる】です」

「なるほどのう。かっとなる、と、どなるの、がったいじゃのう」

「さすがは金ちゃん、そのとおりです。【かっどなる】はすぐにかっとなって、かっとなったら怒鳴りまくりまします。うるさいのなんのって」

「だども、かっとなって、どなるだけかのう」

「かっとなった人間は、よく人を殺したりしますが、かっとなったおばけは、怒鳴るのみです」

「それは、しんしてき、じゃのう」

頃合をみはからって懐爺は、孫の手をふりまわし、

「出てこいや、【やけくそおばけ】よ、出てこいや」

「はい」

といて、川べりの草葉の陰から出てきたのは、おとなしそうな女のおばけでした。

ぬっと出てこなければ、おばけにおもえなかったかもしれません。

「これはこれは、きれいなご婦人。あなたはいったい、どなたですか」

懐爺がたずねました。

「わちきは、【かっどなる】の妻でござんす」

「どうして、奥さんが」

懐爺がたずねました。

すると奥さんはさめざめと泣きはじめ、

「くく、主人の【かっどなる】は、くく、かっとなって、くく、どなってばかり、おりましたので、くく、脳溢血（のういっけつ）のため、くく、先日亡くなってござんす」

「おばけでも、のういっけつに、なるんかのう」

ぼくがたずねました。

奥さんは泣くのをやめて、

「ほかのおばけのことは知りませんが、【やけくそおばけ】の敵は、人間より、まづ病気でござんす。なにしろめちやくちや自棄糞になるものですから、もっとも気をつけたいのが、こころの病気、それから脳と心臓の病気なのでござんす」

「それはそれは、ご愁傷（しゅうしょう）さまでござんす」

と懐爺がいうと、よよと泣いて、【かっどなる】の奥さんは川べりの草葉の陰に

消えてゆきました。

【むちゃくちゃ】

「あの草葉の陰のむこうのあれはなんでしょう」

懐爺がききました。

「わしには、おちゃのきに、みえるがのう」

「当たり。あれはお茶の木です」

「だども、ふつう、ちゃばたけは」

「茶畑ではなく、ただのお茶の木です」

「あんなもんが、どうしてここに」

ぼくがいうがはやいか、懐爺は孫の手をふりまわし、

「出てこいや、【やけくそおばけ】よ、出てこいや」

「ほいほい」

お茶の木の根元から飛び出したのは、

「もしかして、あのひでよしの」

「豊臣家のお茶々さまではありません、あの美女は【むちゃくちゃ】」

懐爺がいました。

「ほいほい。あたしゃ【むちゃくちゃ】、【やけくそおばけ】じゃないわよん」

「あいかわらず、自棄糞になって、無茶苦茶してるんですか」

懐爺がききました。

「だってさ、だーれも綺麗（きれい）だっていってくれないんだもん」

「いまわたしがいいませんでしたか。美女と」

「美女と綺麗はちがうよん」

「それではいいなおします。綺麗なひとがでてきてよかったね、金ちゃん」

「あの有名な金ちゃんかあ」

ことのほか【むちゃくちゃ】は嬉しそう。

「ちっとも、むちゃくちゃ、ではないのう」

ぼくがいうと、

「これでも、昔はまあ、口にだしていうのもおぞましい」

懐爺が厭な顔をします。

「くそじじい、なんちゆうこというんじゃ。あたしゃ、身持ちが固いんだよ」

「みもちって、なにかのう。なにが、かたいんかのう」

ぼくがきくと、【むちゃくちゃ】は、こまった表情で、

「つまりさあ、わたしゃ男嫌いということよ」

「わしと、おなじじゃ。わしは、おんなぎらい」

「同じじゃないじゃん」

といいながらも【むちゃくちゃ】は上機嫌で、



「女嫌いの金ちゃん、男嫌いの【むちゃくちゃ】と暮らそうね」  
懐爺が孫の手をふりまわし、  
「駄目です、駄目よ駄目駄目」  
「ふん、けちじじい。あたしゃ頭にきたから消えるよ」  
「あいかわらず気が短い。無茶苦茶やらないようにね」  
懐爺は優しく声をかけます。  
それから音も無く【むちゃくちゃ】が消えると、  
「あぶないところでしたね。【やけくそおぼけ】の世界へ無理矢理連れていかれるところでしたよ」  
「ええんじゃ。わしも、こうなったら、やけくそじゃい」  
「まあまあ、次がありますからね」  
「つぎも、びじょが、ええのう」  
「金ちゃん、女嫌いじゃなかったのですか」  
「そらあ、おもてむきじゃ」

#### 【むしゃくしゃ】

「さらにあのむこうの藪から、武者がでてきます」  
懐爺が指をさしました。  
「むしゃたあ、さむらいのことか」  
「侍の風上にもおけない、【むしゃくしゃ】です」  
「そんなやつ、あいたくはないのう」  
「でもこれも勉強ですから」  
「べんきょう、したくないのう」  
ぼくは正直にいいました。  
でも遅かったらしい。  
ぼくがそういうよりはやく、懐爺は孫の手をふりまわし、  
「出てこいや、【やけくそおぼけ】よ、出てこいや」  
「でるぞ、でるぞ、でるにはでるが、余は【やけくそおぼけ】ではござらん。【むしゃくしゃ】であるぞよ」  
でてきたのは、侍というより、じつに偉そうな殿様。  
「わしは、ああいうやつは、きらいじゃ」  
懐爺の耳にそっと囁くと、  
「きこえたぞ、【むしゃくしゃ】たる余は、むしゃくしゃするのう。これ爺、そのこわっぱを成敗いたせ」  
懐爺は大音声をあげ、  
「【むしゃくしゃ】の殿、そんなつまらぬ理由で、何人の罪なき者たちを成敗したのですか」

「つまらぬだと。爺、そちも成敗されたいか。余が成敗した者たちは、十万人はくだらぬわい」

「ひどい、さつじんきじゃ」

ぼくはつぶやきました。

「いやはや、一人殺すと殺人者、十万人殺すと英雄か」

懐爺は溜息をつきながらも、孫の手を【むしゃくしゃ】の前に突きだしました。

「爺よ、余をどうするつもりじゃ」

「成敗するつもりですよ」

「血迷うたか。余はおばけじゃぞ、【むしゃくしゃ】じゃぞ。成敗なんかされるはずがないではないか」

かんらんかんらと、【むしゃくしゃ】は笑いました。

しかし、懐爺が孫の手で、頭をこつんとやると、【むしゃくしゃ】は頭を抱えたまま、消滅してしまいました。

「よわい、おばけじゃのう」

ぼくはいいました。

「威張りくさっている奴ほど、弱いものですよ」

懐爺はいいました。

## 【ぶったまげ】

「こんどはなんじゃ」

ぼくはききました。

「【ぶったまげ】です」

懐爺は即座にいいました。

「わかったぞい。すぐに、ぶったりする、おばけじゃろ」

「さすがは金ちゃん。見事な推理です」

「だれにだって、わかるぞい」

「けれども、いい忘れていきますよ」

「なんじゃろな」

「すぐに、ぶったりするくせに、自分で驚くことです」

「ぶったまげる、というわけか」

「はい」

「せいかくのわるい、おばけじゃのう」

「もう一つ、いい忘れていきますよ」

「なんじゃろな」

「【ぶったまげ】は髷（まげ）をつけています」

「また、ぶし、かのう」

「それが武士ではないのに、髷をつけています」

「なまいきじゃのう」  
「生意気が【ぶったまげ】の最大の特徴です」  
「ええよ、ええよ」  
「ええとは一体」  
「だから、そんなおぼけ、ださんでええ」  
「そういう意味ですか」  
「そうじゃ」  
「いいんですか、折角（せっかく）出せるのに」  
「ださんでええ。なまいきは、きらいじゃ」  
「わたしも嫌いです。わかりました、やめておきましょう」  
「それでええ、それでええ」  
「【ぶったまげ】は、待ちわびているでしょうがね」  
「やくそく、しとらんじゃろ」  
「約束はしていませんが、【むしゃくしゃ】が出たので、次は自分の番だとおもっているはずですよ」  
「【ぶったまげ】は【むしゃくしゃ】と、なかよしかい」  
「競争心が強いだけです」  
「よけいにおるい、せいかくじゃのう」  
「おぼけっぽくて、それも魅力ではありませんか」  
「なるほどのう。だば、だしてもらおうかのう」  
「もう遅いです。〈出てこいや、【やけくそおぼけ】よ、出てこいや〉と、なかなかいわないものですから、居眠りしちゃっています」  
「そうかい」  
「寝た子、いえ、寝たおぼけを起こすと、ろくなことはありません」

### 【やけくそおぼけほんけ】

「あのう」  
と懐爺がいいにくそうにいます。  
「【やけくそおぼけ】の本家がいるんですが、会いたくはないでしょうね」  
「【やけくそおぼけほんけ】かい。ながったらしいなまえじゃのう」  
「会いたくはないでしょうね、金ちゃん」  
懐爺はまたききました。  
「あたりまえじゃ。やけた、くその、おぼけじゃろ」  
「ばれましたか。でも焼けた糞は臭くはありませんよ」  
「どうあれ、くそはくそじゃ」  
「すいません。では【やけくそおぼけほんけ】も割愛（かつあい）させていただきます」

### 【ふんころがし】

「あのう」

と懐爺がいいにくそうにいます。

「なんじゃ」

「【やけくそおばけほんけ】のともだちに【ふんころがし】がいるんですが」

「ふんが、ころころ、ころがってくるんか」

「まあそういったもので、糞は転がってくるのではなく、糞を転がすのです」

「だれがじゃ」

「金ちゃんが」

「あほか。なぜに、わしが、ふんを、ころがさねば、ならんのじゃ」

「それは、つまり、その、あの、あれです」

「はやくいわんか」

「金ちゃんが糞を転がすと、糞がどんどん大きくなるんです」

「だから、なんじゃ」

「金ちゃんは、雪だるま、つくるの、好きでしょう」

「ゆきだるまなら、ええが、くそだるまは、すかん」

「同じ原理（げんり）なんですがねえ」

「かいじい、いいかげんにせいや」

「すいません。では【ふんころがし】はおよびでない、ということで」

### 【ふんどしふんふん】

「あのう」

と懐爺がいいにくそうにいます。

「なんじゃ」

「【ふんどしふんふん】というおばけ、これは面白いんですがねえ」

「かいじいよ、わしを、ばかにしとりやせんか」

「金ちゃん、怒らないでくださいよ」

「ふん」

### 【いまぞゆく】

「あのう」

と懐翁がいいにくそうにいます。  
「またかい。こんどは、くそでのうて、しょうべんかい」  
「【いまぞゆく】っていうんですがね」  
「そいつは、うまのおばけじゃろ」  
「ばれましたか。でも、【うまぞゆく】でなくて【いまぞゆく】です。馬は馬でも暴れ馬。人間を見ると、いまぞゆくいまぞゆく、とわめきながら突進してきます」  
「あいたくはないのう。けがしたら、どうするんじゃ」  
「まあ捻挫（ねんざ）や脱臼（だっきゅう）くらいでしたら、わたしがなおしますが、骨折したらいけませんね」  
「いけんいけん。がっこういけん」  
「骨折したら、少なくとも一ヶ月は、おとなしくしていないといけません、金ちゃんには無理でしょうね」  
「むりむり。いちにちでもむり」  
「それではこれも、割愛させていただきます」  
「もしかして、かいじいよ、てをぬいておりゃせんか」  
「金ちゃんには、なんでもお見通しですね。孫の手が泣きますね」

### 【しんだるだん】

「あのう」「あのう」で日が暮れる。  
すでに夕靄がたちこめていました。  
ぼくたちは、中山砦に行きました。  
砦といっても、正確には砦跡で、中川と中山の間にあります。  
戦国時代、中山には中山城があって、その城が攻められそうになったときに、出城として造られたのが、中山砦なのだそうです。  
「もしかして、また【むしゃくしゃ】かのう」  
ぼくがうんざりした声でいうと、  
「あんないいかげんな奴とはちがいます」  
懐翁はきっぱりといったものでした。  
「それは、あんしんしたぞい」  
「ここで守った武士たちは、みんな自棄糞の命知らずでした」  
「なぜじゃ」  
「攻めてくる大軍は十方で、出城には百人しかいないのに戦うっていうんですから、命は捨てているでしょう」  
「ひやくにん、たい、じゅうまんにん、かのう」  
「それでその百人のなかの大將が、出城の軍団を【しんだるだん】と名づけたのです」  
「そのたいしょうは、ゆきむら、かのう」

「真田幸村は大阪城の出城で、真田丸です。中山砦の時代はもっと前です」  
「ならば、たいしょうの、なまえは」  
「たしか、新樽、新樽団衛門（しんだる・だんえもん）」  
「【しんだるだん】 たあ、たいしょうのなまえかあ」  
「あれれ、そうですね。初めて気づきましたよ」  
「なんか、あんいじゃのう」  
「安易、ですか」  
「おぼけは、あんい、なのかのう」  
「そうかもしれません。なにかの拍子で、ぱっと、おぼけになってしまうことが多いですね。安易といえば安易だし、自棄糞といえば自棄糞。もしかすると【やけくそおぼけ】は、おぼけの原点かもしれません」

ものおもいにふけていた懐爺が、つと顔をあげ、中山砦の跡にむかって孫の手をふりまわし、

「出てこいや、【やけくそおぼけ】よ、出てこいや」

「おー」

ものすごい大音声、大音響とともに、あらわれいでたるは、鎧兜（よろいかぶと）に身をかためた、（数えたわけではないけれどおそらく）百人の武士です。

「拙者（せっしゃ）らは、【やけくそおぼけ】ではござらん。【しんだるだん】に候（そうろう）」

なかで一番強そうな武士がいました。

たぶん新樽団衛門でしょう。

「しつれい、いたした、でござる、でそうろう」

ぼくがいました。

どうしたわけか、【しんだるだん】全員が大笑しました。

その機をねらって懐爺が、

「みなさん、どうしてそんなに、自棄糞になったのですか」

とききました。

すると笑いをやめて真顔になった新樽団衛門が、

「じつはな、じいさん。拙者らはみんな、本来、礼儀（れいぎ）ただしく、奥ゆかしい、謙譲（けんじょう）のころをもっておる。だが、そんなころでは、十万人とは戦えぬ。ゆえに、みな蛮勇（ばんゆう）をふるいおこし、あえて自棄糞武士になっておるのよ」

「やはりそうですか。すると演技でしょうか」

懐爺が丁重にきくと、

「それがのう。はじめは演技のつもりが、しだいに本気になってしまったのでござるよ」

「たたかいには、とうぜん、まけたんじゃろのう」

ぼくが遠慮なくききました。

「それがのう、ぼうや。奇跡的に勝利してしまったのでござる」

「げげ、かってしもうたんか。ならば、なぜに【やけくそおぼけ】に、なっとるんじゃ」

「それがとんでもないことに、中山城の城主が、敵の大軍におそれをなして、裏切ったんじゃ」

「うらぎるって、つまり」

「つまり、背後から、拙者らを襲ってきたのでござる」

「むむ、ひきょうものめが」

ぼくはさけびました。

ぼくは卑怯者がいちばん嫌いなのです。

「卑怯者で、憶病者じゃが、城主にとっては、拙者らの命よりも何よりも、お家の存続が大事じゃよって、これは武士の習いというものに候」

「そらあ、【やけくそおぼけ】になるのう。わしも、なかまに、いれてくれんかのう」

ぼくは遠慮なくききました。

「ぼうやが、おとなになったら、ぜひとも【しんだるだん】に加わってください。拙者も歳じゃによって、代わりに大将をやってください。いやいやいやはや、そのひとことで、しばし自棄糞も鎮まりもうした。ではこれにて失礼つかまつる」

といったとたん、【しんだるだん】は、中山砦跡の土に埋もれていきました。

「金ちゃん、やりましたね。おとなになったら、【しんだるだん】の大将ですね」  
懐爺が嬉しそうにいいました。

\*

ぼくがおとなになってから、【しんだるだん】は一度もぼくの前に現れませんでした。

それでぼくはしかたなく、『しんだるだん』という小説を書いたのです。

ぼくの分身たる主人公が、【しんだるだん】の大将になったことは、もちろんいうまでもありません。